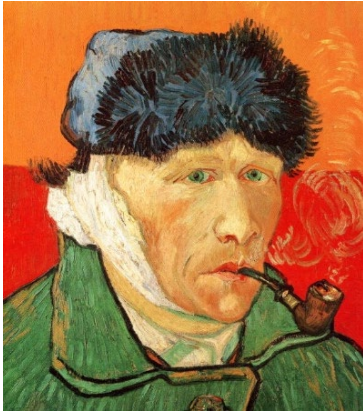


# 樹木と絵画の交差点

## 第14回 ～ゴッホとオリーブ～

炎の画家、フィンセント・ファン・ゴッホは、37歳で亡くなるまでの数年間、最後の力を振り絞るように精力的に描きました。その頃のゴッホの絵の主要なモチーフは糸杉、そしてオリーブです。

1889年、ゴッホは画家ゴーギャンとの共同生活での衝突がきっかけで発作を起こし、南仏サン・レミにある修道院療養所に入所しました。失意の渦中ながらも、サン・レミでの1年間はゴッホ絵画の充実期でした。1889年に描かれた2点のオリーブの作品を見ていきましょう。



### フィンセント・ファン・ゴッホ (1853-1890)

ゴーギャンとの諍いの後、耳を切り落としたあとの自らの姿を描いた。明るい色彩を背景に悲惨な怪我を負った自分を見つめる、不思議な静けさに満ちた自画像。

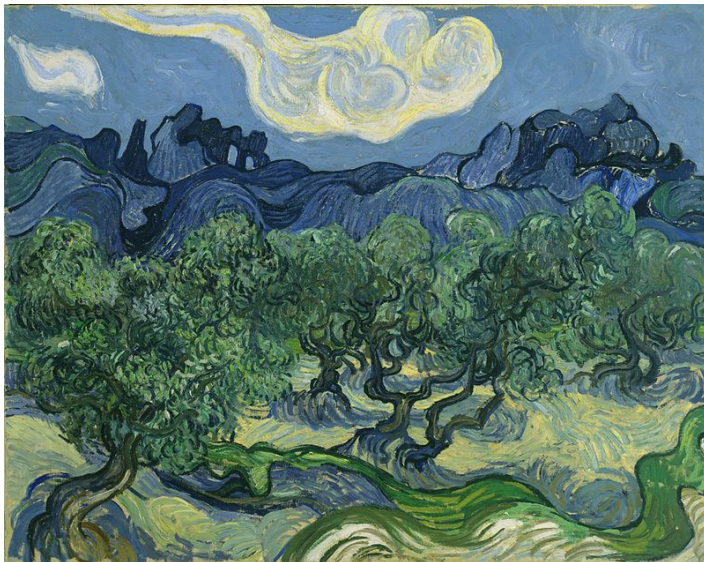
「包帯をしてパイプをくわえた自画像」(部分) (1889年)

個人蔵

## 修道院のオリーブ林

ゴッホが南仏サン・レミ・ド・プロヴァンス郊外にあるポール・ド・モーゾール精神病院に入所したのは亡くなる1年前のことでした(1889年5月)。ゴッホはこの古い修道院に併設された静かな療養所で1年間の療養生活を送り、創造の羽をはばたかせました。

オリーブは南欧の人々にとって大切な精神的シンボルで、ギリシャ神話では「女神アテナが創り出した木」、キリスト教では「聖なる木」と考えられました。実用としても身近で、聖油として使われる他に食用油、薬、燃料など様々な用途があるため、修道院の脇にオリーブが植えられることはよくあったようです。ゴッホは特別に療養所の一室をアトリエとして使用すること、施設の外に出て描くことを許されました。周囲のオリーブ林を散策しながら絵の構想を巡らせたことでしょう。牧師の父のもとに生まれ、青年時代は伝道師を目指していたゴッホにとって、オリーブは描くべき「強いモチーフ」となっていったのではないかと思います。荒んだ心情と反比例して湧き上がる旺盛な創作意欲を託して、多くのオリーブの作品が生まれました。



昼なのか夜なのかわからない色調が独特で、背景の山や地面までもが渦巻くタッチで表現されており、不安をかき立てられます。

右から伸びる園路や背景の雲や山がデフォルメされている一方で、主役のオリーブは比較的忠実に描かれています。樹齢が長く、荒地でもたくましく成長するオリーブの生命力に触発されたかのようにパワーに満ちた画面です。ゴッホが絵の制作のために振り絞った気力が伝わってきます。

ちなみに、決別した画家ゴーギャンもこの頃「オリーブ園のキリスト」という絵を描いています。

オリーブの林 (1889年)

ニューヨーク近代美術館蔵



## 祝いと祈りのオリーブ

プロヴァンス地方ではかつて11月頃のオリーブ収穫の日にオリーブオイルを使ったごちそうを食べ、歌い踊って今年の収穫を喜び来年の豊穡を祈る、という日があったといわれます。オリーブの実には傷みやすく、収穫後2日以内には採油しなければならないため、オリーブの収穫はタイミングを見極めて一気に行われます。下図「オリーブを摘む人々」で、ゴッホはオリーブ収穫に従事する人々を描いています。ゴッホは初期の絵では働く農民をモデルにして、勤勉に働く人々に宿る崇高さをテーマに描いていました。いつも理想を追い求めてやまなかったゴッホは、このサン・レミのオリーブの収穫風景にも自らの理想の境地を見出したように思えます。激しさがやや薄らいで安寧さが感じられる美しい作品です。



オリーブを摘む人々 (1889年)  
クレラー=ミュラー美術館蔵

畑仕事をする農民や暮らしをテーマにしていた時期に連なる作品。日が暮れるまでオリーブ摘みの作業をする人々が描かれています。労働と収穫と喜び、日々の営みを祝福するような穏やかな色調に、天上的な安らぎが感じられます。

激しい色相の対立は見られず、空の黄色-橙色と地面の水色-橙色のグラデーションをオリーブの緑色が優しくつないでいます<sup>\*</sup>。夕焼けに染まる空の合間からのぞく青空の色が画面の調和に一役買っているようです。オリーブは傷みやすく、棒で収穫するよりも手摘みが良いとされます。画面では小さなかごを枝にぶら下げたり、地面に置いたりして作業をしています。

## オリーブについて

オリーブ (*Olea europaea*) は地中海沿岸原産のモクセイ科オリーブ属の常緑低木～高木です。オリーブの歴史は人類の歴史と同じくらい古いといわれています。有史以前から存在する野生種を5,000～6,000年前ごろから栽培するようになり、現在では栽培品種は1,000種以上になります。ゴッホの描いたサン・レミのオリーブは、南仏プロヴァンス原産で樹形が横に広がり成長する(開張型)“アグランド種”かもしれません。オリーブは乾燥した土地でもよく育ちます。芽吹きがよく次々と新梢を伸ばし、無剪定のまま放任すると8m以上になることもあります。



オリーブの樹形・幹・葉  
撮影場所：代々木公園 (東京都渋谷区)

日本では江戸末期にフランスから導入され、横須賀、神戸、小豆島などに植えられました。現在は、香川県がオリーブ収穫量日本一で全国シェアの87.4%を占めています(令和元年産)。香川県でのオリーブ栽培の主な品種は「マンザニコ」、「ルッカ」(開張型)、「ミッション」(直立型)、「ネバディロ・ブランコ」(半直立～開張型)です。日本には、オリーブに大きな被害を与える固有種「オリーブアナアキゾウムシ」がいます。幼虫・成虫は樹皮や幹の内部を食い尽くし、致命的な被害を与えます。明治時代に初めてオリーブを栽植してからわずかの期間で被害が出ました。もともと同じモクセイ科のネズモチなどに寄生していたものが、新しく入ってきたオリーブを特に好んで食害するようになってしまったのだそうです。2015年の時点では、ヨーロッパではまだこのゾウムシ被害は報告されていないということなので、流通のグローバル化で人とモノの行き来がより多くなっている現在の状況からすると、今後ますます気を付けなければならない害虫でしょう。日本最古とされる神戸・湊川神社のオリーブの木もこのオリーブアナアキゾウムシの被害に遭っており、現在に至るまで様々な駆除の研究が行われています。

代々木公園の原宿門から程近い一画に“オリンピック記念宿舎”があります。ここには1964年の東京オリンピックのオランダ選手宿舎として使われた一棟が保存されており、そこに至る園路がオリーブ並木になっています。それにしてもなぜこの並木にオリーブが選ばれたのでしょうか。“平和のシンボルの樹木”であることなど、色んな興味深い想像はめぐるのですが、その理由が知りたいなと思います。並木の奥方向には“オリンピック記念見本園”が続いていて、ここにある樹木は、代々木の選手村で過ごした世界各国の代表選手たちがオリンピック参加の記念に自国の代表的な樹木の種を持ち寄ったのちに、各地の林業試験場で育成された苗木が植樹されたものです。



※注「オリーブを摘む人々」:

この作品は絵具の褪色が激しいとされ、顔料の分析により当時のままの色ではないことが分かっている。

《参考資料》

ファブリーツィア・ランツァ著 伊藤綺訳「オリーブの歴史」 原書房 2016年(「食」の図書館)

岡井路子著「NHK 趣味の園芸 12か月栽培ナビ⑩ オリーブ」NHK出版 2018年

小野塚千穂、パワジオ倶楽部・前橋監修「育てて楽しむ はじめてのオリーブ」(一社)家の光協会 2019年

相川貞晴、布施六郎著「代々木公園」郷学舎 1981年(東京都公園協会監修・東京公園文庫 27)

神戸新聞 NEXT 日本最古のオリーブ“延命”へ 樹木医が「寄せ接ぎ」(2019年4月6日)

《参考 URL》

「オリーブの歴史」小豆島オリーブ園 ホームページ

<https://www.1st-olive.com/guide/story/> (参照 2022-7-16)

香川大学農学部附属農場 Facebook (2015年5月31日)

<https://www.facebook.com/noujo/posts/957476004287091> (参照 2022-7-16)

香川県農業試験場 小豆オリーブ研究所 オリーブの品種・生態

[https://www.pref.kagawa.lg.jp/content/etc/subsite/noshi\\_olive/hinshu/index.shtml](https://www.pref.kagawa.lg.jp/content/etc/subsite/noshi_olive/hinshu/index.shtml) (2022-7-16)